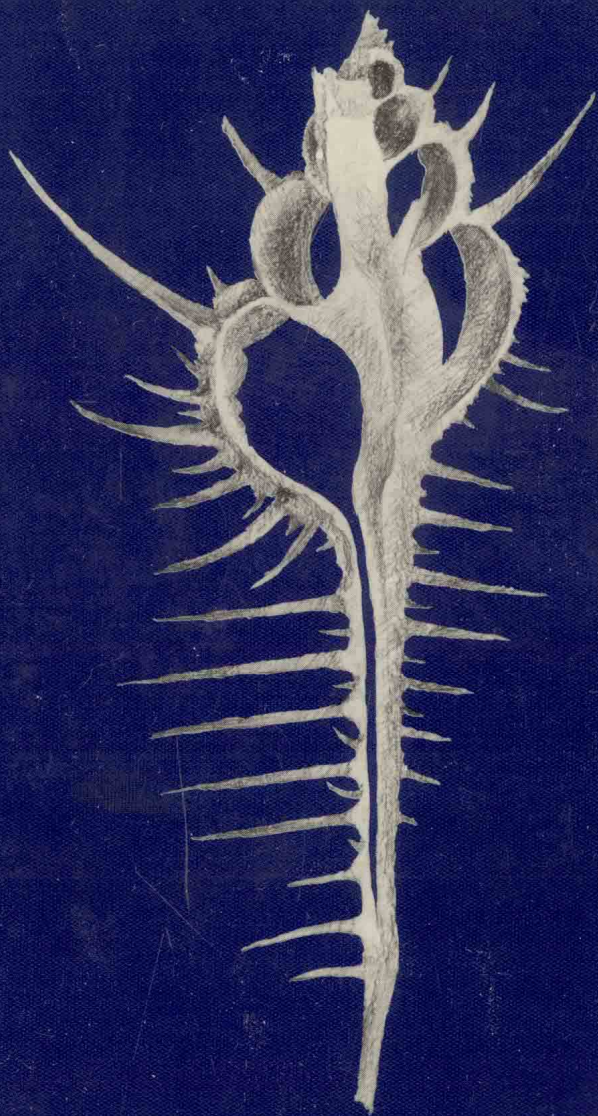


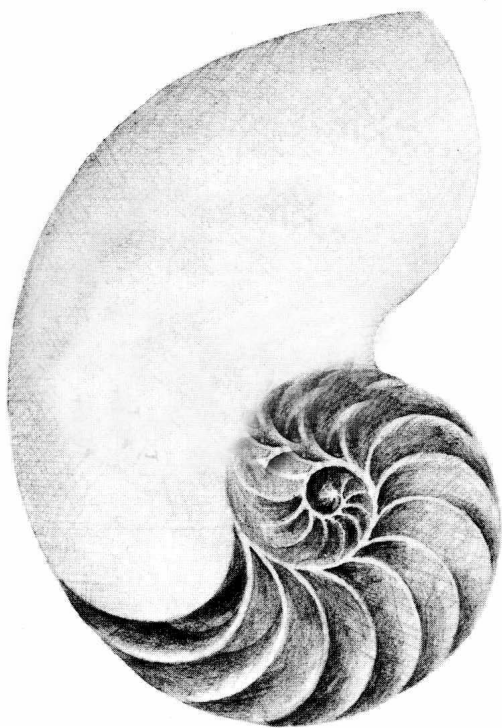
ゆきてかえらぬ

瀬戸内晴美



瀬戸内晴美

ゆきてかえらぬ



文藝春秋

ゆきてかえらぬ

一九七一年六月二十日 第一刷
一九七六年七月十日 第四刷

著者 瀬戸内 晴美

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

本文印刷 理想社印刷所
カバー等印刷 図書印刷
製本 大 口 製 本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

△ゆきてかえらぬ▽ 目次

ゆきてかえらぬ 五

三鷹下連雀 五

霧の花 夢二秘帖 二五

春への旅 一七

鴛鴦 一九五

あとがき 二四九

装帧
藤田吉香

ゆきてかえらぬ

ゆきて
かえらぬ

昭和三十八年の夏のはじめだった。さる放送局のラジオのポピュラーな茶の間向け番組が、私の郷里の徳島市で公開録音されることになり、同市の出身者だということから、ゲストとして招かれ、帰郷した際であった。長年続いて来たその番組には、レギュラーとして著名な老俳優や音楽家やジャズナリストが出演していて、私も彼等と東京駅から郷里への旅を同行した。旅の機会の多い彼等は、かえって空路を嫌うらしく、その時も最も遠廻りなコースが選ばれていて、山陽線廻りで瀬戸内海を渡り、四国入りという旅程であった。退屈な長い旅路の時間つぶしの雑談の中に、ひとりの名前が浮んできた。

「徳島といえば、薩摩治郎八がいるんじゃないのかね」

「いるんだよ」

「へえ、治郎八があんなところにいるんだって？」

「ああ、数年前からあそこで寝たつきりなんだ」

「まだ生きてたのかい、あれ」

「ひどいんだそうだよ、今の暮し。ぼくは何とか時間をみつけて見舞ってやるつもりなんだ」

「徳島の人間だったかね」

「いや、女房の里にいるらしい」

そんな会話が列車が岡山に着く前あたりから始められ、ひとしきり、その変った名前の未知の人物のことが私の横で話題にされていた。同行者は四十歳になった私が子供扱いされるほどの高齢者が多いため、その古風な名前の響きが何となく似つかわしい。それまで全く聞いたこともなかったその名が、度々耳に入ってくるうちに、芸名かペンネームのような印象で私の耳にも馴染んできた。すると、どこかで、聞いたことや見たことがあるような感じさえ、かすかにしてくるのだった。

「あんた、知らない？ 薩摩のこと」

会話は、さっきからぼんやりした表情で話の外にいる私にも向けられてきた。知らないと答えると、彼等は口々に、その人物について私に語ってくれようとする。その場では私以外のすべての人が識っているらしい人物の説明は、めいめいが口にすればするほど、かえって断片的

で、印象が混乱する。たまたま列車が岡山に着き、乗りかえで話がとぎれるまでに、私が得た薩摩治郎八なる人物の知識は、「実に面白い人物」「けた外れの大富豪だった男」「パリでありったけの財産を使い果した男」という程度のことだった。

パリと、ちょん髷でもつけていそうな名前の対照が印象に残った以外は、私にはさして興味のひかれる人物でも、縁のありそうな人柄でもないように思われた。

徳島での私たちの短い役目が終わった宵、自由行動から帰ってきた各人が料亭での会食の席で顔をあわせたとき、一行の中で二番目に高齢の老音楽家が

「行つて来たよ、薩摩のとき」

と口にした。郊外の名人人形師の許を訪れたり、郷土史家に逢つてきたりしていた他の人々も、各自の客膳の前からいっせいに老音楽家の方に顔をむけた。肉の薄い顔に暗い表情を浮べて、音楽家は、病人が思ったよりよさそうに見えたこと、細君の里の炭屋の二階に寝ていて、全く零落しきっていたこと、音楽家の思いがけない訪問に涙を浮べて喜んだことなどを、いく分詠嘆的な口調で語った。

「あの一世の栄華を極めた男がねえ」

「老残だな」

もう人生の旅路をほとんどたどりつくしたように見える老人たちの、その場の口調には、言

外にこめられた感慨の重さがあつて、私もようやくその人の話題にひきこまれそうになった。しかしまた、その時、賑やかにあらわれた華やかな妓たちの、浮きたつ雰囲気で、たちまちその沈んだ話題はかき消されていった。

それっきり、私はその人のことを思いだす機^{おも}もなかった。

二年あまりがすぎた。私は旅先のパリで偶然のことから加藤氏という画家の夫妻と識り合った。大学出で競輪の選手をしていたという変わった経歴の持主のその画家は、スピードと動きが画面の中から躍り出てきそうな、不思議な新鮮な絵を描いていた。精悍な鳥禽類を聯想させる鋭い目と引きしまった軀つきの中に、彼の過去が匂っている。ふと、自転車競技の美しさを語りだすと、画家の口調が異常な熱を帯びてきた。

青木繁の描く女に似た顔と軀つきをした画家の夫人は、東大仏文出の才媛で、画家の横から、画家よりもっと熱っぽい口調で自転車競技の醍醐味について話します。

パリのさわやかな五月の夜、煌々と輝きわたるライトに照らしだされ、真緑の芝生が月夜の海原のようにひろがる競技場の美しさ。沙漠のような静寂、闘魚のように優雅な自転車の銀輪の輝きとスピードの流れ。

「四次元の世界なのよ。あの美しさをどうしたってあなたに見せてあげなくちゃあ」

自分の味わった感動を正確に伝えようとして、言葉の足りなさをもどかしがり、息をつめて、目のふちを酔いにうるんだように赤らめた夫人が、その時、画家を見かえった。

「そうそう、薩摩さんはたしかこちらのお郷里くわににいらっしやるんじゃないかって」

私は軽い愕きをむきだしにして聞いた。

「薩摩治郎八さん？」

「ええ、そう、自転車で思いだしたんだけど、薩摩さんと自転車競技を結びつけたのは加藤で、パリと加藤を結びつけてくれたのは薩摩さんなんですもの」

私は三年前の故郷への旅を、思いがけない場所と時にあり思い浮べた。中風で何年も寝たっきりの病みさらばえた零落の薄穢い老人の幻影が、見てきたように目に浮ぶ。彼の住んでいる徳島の山沿いの細長い佐古町——昔ながらのせまい道幅の旧道の両側に、低く傾きかかった軒を並べた暗い家々——炭俵や煉炭が雑然と積み並べられた埃っぽい炭屋の土間、煤けて黒光りした天井や店の柱、大人の頭がつかえそうな低い二階の格子戸から洩れる縞目の鈍い陽光、その光りの中の、見るからに綿の堅そうな木綿のせんべい蒲団、そばがらの萎えしぼんだ汚れたくり枕——私の遠い記憶の中にある故郷の町並みや家や、目にしたことのある貧しさの表情が描きだした幻影だった。洗いざらしの金巾かなきんの衿あてをつけた格子模様の掛蒲団をこんもり

持ち上げる力もないほど病み衰えた老人と、華やかで典雅で、最も近代的な知的競技だと、加藤夫妻が激賞するモダンな自転車競技というものがとっさに結びつかなくて、私はとまどっていた。

二十余年前に故郷を出ている私には、今でもやはり、故郷を臉に描くと、戦前の、自分の育った古い鄙びた城下町の姿でしか浮んで来ない。徳島は戦災を受けており、一夜で町の九割は焼きつくされ、戦後の徳島にはもう全く昔の^{おもかげ}俤はなくなっている。復興が格別遅れたかわりに、同じ夜、同時に戦災を受けた四国の他のどの町よりも、思いきった区劃整理を断行し、道路が広く、町全体が近代化して、面目を一新し、よみがえっていた。その新しい故郷の町へ、私は戦後幾度か帰っていた。にもかかわらず、十八の年までそこに暮した古い徳島の町の俤が、頑固に記憶の中にとりついているのだった。

パリで結婚した加藤夫人は私同様、薩摩なる人物に面識がなかった。

「でも、度々主人あてに徳島からお手紙下さるし、その文面が、せつないほどパリに恋いこがれていらっしゃる感じだから、何だか、他人のように思えなくなってしまったの。毎回、来年何月何日は、船便でパリを訪れますって書いていらっしゃるのよ。それが、ここ二、三年来いつもなの。お手紙をみると、その計画が本当に今にも実現しそうに書いていらっしゃる。それに必ず、パリ到着の日付が入ってるんですもの」

夫人のその話が私を描えた。もう数年来、中風で寝たっきりの筈の老残の病人が綴る夢のような願望の切なさ、たまたま旅愁の身に沁みはじめていたその時の私の感傷に媚びるようであった。私は次第に熱心な聞き手になって、知らなかった薩摩氏の往年のパリの栄華の話に耳を傾けていた。

シャイヨー宮の華麗な噴水の虹を、はるかに見下す高級アパートの六階が彼等の住居だった。窓の下には、パリの街衢の屋根が波うちながら地平の涯まではるばると広がっていた。

そのアパートのすぐ真向いに、道路ひとつへだてて、灰色にくすんだ昔ながらの、ユトリロ調の建物が見える。その窓の一つでは、白いボンネットをかぶった老婆が飴色の猫を大きなエプロンの膝にのせたまま背をまるめ、祈るような姿勢で居眠りしている。そのとなりの窓では、若い肥った女がセーターの袖を勢いよくたくしあげ、ぼら色の腕に力をこめて、アイロンかけに余念もない。ぬいだ上衣を椅子の背にかけたまま、熱心にセロを弾いている男もあるかと思うと、せまいテラスの、黒レースのような唐草模様の鉄柵にとりすがって、隣どうしの子供が、二人せいっぱいに上体をよせあい、軀じゅうをことばにして話しあっているの見える。そうしたつましい生活の滲みでた光景を背景にしながら、夫妻の話を聞いていると、薩摩治郎八なる人物のけた外れのロマネスクな栄華物語が、いつそうこの世のものとも思えなくなってくるのだった。

その日、私は加藤夫妻から、薩摩治郎八著「せしぼん」という青紫の表紙の本を借りて帰った。昭和三十年に発行されているその小型の本は、「半生の夢」という追懐的自叙伝と「せしぼん」「ロマンティストの花束」という女性遍歴を主題の随筆から成り立っていた。

堀口大学が序文を寄せており

「閑院宮、西園寺公の昔は知らない。

僕の同時代人の中では、薩摩治郎八君が僕の知る限り、ヨーロッパの社交生活に、長期に渡って一番派手に金を使い続けた日本人だ。M侯爵夫妻のロンドン、パリに於ける大使館づき武官としての生活は随分華やかだった。だがこれは期間が短かった。H侯爵と実業家のM氏も随分金を使われたが、これは美術品の蒐集に使ったので、純粹の消費とは言えまい。一種の投資だから。ところが薩摩君のは、只なんとなく使ったのだ。ヨーロッパの社交生活を楽しむために使ったのだ。自分も楽しみ、人を楽しませる以外の目的なしに只何となく使ったのだ。この点に僕は感心する。それも三十年の長きに亘ってだ。」

というような文章ではじまり、治郎八がまだ十五歳の少年時代「女臭」と題した三百枚の小説を書き、その頃私淑していた水上瀧太郎に見せたところ、水上瀧太郎はそれを読み終って、その早熟ぶりに驚嘆して

「君がせめて二十五歳になっていたらいざ知らず、現在これをどこに発表しても、誰もこれを